

---

# 静天遠く

史真

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

静天遠く

### 【コード】

N1960C

### 【作者名】

史真

### 【あらすじ】

帝国と皇国の争いは長い間続いていた。皇国は帝国と接している三つの地域を独立させ王国とし、帝国はその三国を陥とすのに、苦心していた。

陽が沈みかけている。見てみると、幾らかの哀愁が湧いてくる。

リークは、この辺に陣を張ると伝令を出した。

「原野戦となればこちらが圧倒的に不利。しかし私は、この戦で帝国を徹底的に叩いておくべきだと思います」

陽が沈んだ後、幕舎の中で軍議を開いた。

「この隘路を利用しましょう。この隘路を抜けるまで撤退を装っておびき寄せます」

声は凛々しい。だが髪は長く、顔は端正であるが、どこか柔らかい。

男であれば。リークは、リルの祖父が死ぬ間際に言った言葉を繰り返した。

彼奴は女であるが故に、いくら優秀でも、いくら戦功を挙げようが、周囲からは軽蔑の目で見られるであろう。尤も、彼奴を評価し、共に戦おうとする輩もいる。唯最後は、味方からの、哀れな裏切りで命を落とすことになる。もし、そうなられたくないのであれば、お前が、お前が死んだ後も、守ってやらなければならぬ。

それから七年間、まだ十であったリルを引き取り、娘同然に育てた。母はリルが生まれて間もなく死に、父と兄弟は皆、帝国との戦いで戦死した。家柄なのか、帝国への恨みなのかは解らないが、リルはやはり、入軍を希望した。初めは一兵卒で良いと言っていたが、士官学校を上位の成績で卒業し、異例の早さで将校まで昇進した。

「私が先鋒と殿を勤めます」

どうでしょう。と、口で言わずに目で言う。

これが初陣ではない。国境際で小さな争いがあった時は、リルを派遣していた。しかし今回の戦は規模と訳が違う。この国、グリナッド王国の存亡が懸かっている。この国だけではない。北方三国同盟。つまり、グリナッド、ルゼイラ、ナスクの同盟。一国でも破れ

れば、その全てが滅ぶ戦だった。

「簡単におびき寄せられるほど敵の指揮官は単純なのか？」

「はい。この戦線に来るのは初めてのようですが、他の戦線での戦いを見ても勢いだけで戦をしています」

帝国の侵略は、毎回三方より同時に行われる。

「さらに帝国の指揮官はこの頃戦功らしき戦功を挙げておりませんので焦りがあります」

「魔軍の情報は？」

帝国は、数年前から、魔軍と称される軍団を造っていた。魔軍は、この世の人ではない人で構成されている。ほんの数人でも、数百の部隊を相手にできる程の力を持っている。

「今のところその情報は入っておりません。唯、中央のルゼイラにはかなりの数が投入されたと聞きました」

「そうか。レハリナス、竜の状態はどうだ？」

地図を見つめていた中堅の将校が、顔を上げた。

「万全です。帝国の竜はこちらと同じ二十ほど」

「勝てるな？」

「勿論です」

普段は大きな目が細くなり、不適な笑みを浮かべている。

「法兵の数は？」

「二百ほど」

法術と呼ばれる魔法を使う者たちを、法兵と呼ぶ。法術を使える者の数は少なく、数は少ないが汎用性が高く、高威力であるため重宝されている。

「解った。先鋒はリルとする。テトラを連れていけ。テトラ、リルが無茶をしたら止めるよ。ぶつかったら即座に引く。それを繰り返せ」

次々に指示を出し、全ての指示が終わった。

「何か意義は？」

何もなかったので、軍議は解散となった。

「若いな、皆」

「全く。勢いがあつて結構」 軍議が終わつても残つていた、カンルが答える。

「だがお前を越す器はいない」

「人はいつか死ぬのだぞ、カンル」

「信じられるか、お前が死ぬなど」

「死ぬのではないのかもしれない。死ななければならぬ時が来る。それだけかもしれない」

「だがまだその時はこない」

「当たり前だ。今は。だがな」

地方の小さな商人の家庭に生まれ、貧しかったが、楽しかった。いつの日からか武芸に打ち込み、軍学を学んだ。十六の時、軍に入った。両親は入軍にかなり反対したが、家を出、王都ミレラムを目指した。

「死か」

ぼつりと言つた、カンルの言葉が虚しく響いた。

朝。陽が昇る前から進発したので、朝焼けが眩しい。

頻繁に斥候を出した。帝国との国境に、かなり近づいている。

「伏兵の配置が完了いたしました」

伏兵は、本隊よりも早く進発させていた。

「そうか。少し急ぐぞ」

このまま行くと、かなり開けた草原に出、そこで一度ぶつかることになっている。伏兵に一万を割いた。だから実際、二万で十三万を相手にしなければならぬ。被害を最小限に押さえたいが、だからと言って、始めから逃げるつもりでは戦わない。帝国には、本気で追撃してもらわなくてはならない。

恐怖はなかった。あるのは、好奇心。リルは先鋒をすつたので、全騎ではないが、騎馬隊を率いている。リルにとって、大きな戦はこれが初めてだった。どこまで出来るか。先鋒だけでなく、歩兵が反撃に移るまで、帝国の追撃を食い止めなければならぬ。

万が一リルが敗れても、リークが後方にいる。

草原に出た。前方約十里に敵。

「旗を掲げよ」

敵の陣が動き、両翼が前に出る。鶴翼。

「魚鱗」

どちらも、状況に応じた陣だった。

リルの騎馬隊が駆け始めた。法術と矢が飛んでくるが、横に広がった騎馬隊にはあたらなない。

リルが手を挙げた。瞬間、横に広がっていた騎馬隊が、二本の長蛇となった。その二本は、鞭の如く、当たっては戻る。敵の騎馬隊は必死で追い回っているが、追いつけないでいる。

敵の両翼が包み込もうとするが、包み込まれる直前になって徒と共に突き抜ける。

敵を引つかき回したからといえども、圧倒的な兵力差は覆せない。徐々に押され始めた。

「鐘を」

鐘の音が響きわたり、全軍がある方向へと向かって駆け始めた。敵も追ってくる。

谷が見えた。リークは先頭を駆けて、谷を抜けた。後はリルの騎馬隊がどれだけ巧みに敵の追撃を交わしながら、ここまで誘導するかに懸かっていた。

反転して迎え討つ態勢は整っている。来い。思った瞬間、見えた、騎馬隊。その後を追ってきた敵は、すでに勢いがついていてため止まれない。

リークは駆けていた。一人、斬り落とす。突き出された槍をかわし、二人一辺に斬り裂いた。

谷の中程で、火が上がっている。見えた。敵の大将の顔。周りより派手な鎧を着たその男は、明らかに動揺していた。誰も守ろうとはしていない。唯一人で叫んでいる。

一閃。剣が閃き、首が舞い上がった。敵の兵は退路を断られたた

め、引くにも引けず、降伏を申し出る者までいた。

戦場は次第に静寂に戻っていった。

「四万は討ち取りました。今リル様が追撃を掛けております。降伏は一万。馬は三千ほど。完勝でございます」

「浮かれてはおれぬ。リルが戻ったらすぐ救援に向かう」

「は？」

「ルゼイラだ。力の差がありすぎる。このままでは攻め滅ぼされる。もしそうなれば全てが崩れる」

春の陽射しは穏やかだった。

夢を見ていた。

夢の中で女が謝った。正確に言えば妻だが、何も悪くないのに謝った。何に對してか。俺にか。女自身にか。だが自分は、言葉を見つけることが出来なかった。

運命にか。夢の終わりですと、その言葉が浮かんだ。目が覚めると、しきりに自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ノーク將軍。お入りになってもよろしいでしょうか」  
少し待て。そういつてノークは服装を整えた。

「西の戦線の情報です」  
グリナッド。その方面にいる指揮官の顔を思い出そうとしたが、思い出せない。

「指揮官殿は討ちとられました。これは予定通りです」  
思い出す。あの太った醜い肩か。あまりにも役に立たないので、わざと討ち取らせるようにした。生きて帰ったとしても、敗戦の責任を問いつめて死罪。敵に討ち取られ、帝国のために死んだとするのが、せめてもの情けだった。

「しかし損害が大きすぎます。兵は六万を失いました。降伏する者も出る始末です。竜も十頭失いました」  
「何があった」

信じられなかった。今まで、ここまで被害を出した戦があっただろうか。頭が痛くなる損害だった。

「やはり魔軍も使うべきであったか」  
「魔軍云々の話ではございません。警戒もせずに追撃した結果、伏兵に会いました」

溜息。後悔。しばらく目をつぶってた。

「流石リークだ」

「それが今回はリークの策ではないようなのです」

「誰だ」

「それが、リルという若い将校です。歳はまだ二十にもなっていないと聞きました」

「女か」

誰がそんな小娘の献策を聞き入れようか。その点において、ノークは、リークの度胸や覚悟に感嘆した。

「グリナツド軍が後三日で到着します」

後三日。三日で何が出来るか。グリナツドが到着しても、勝てる。ただ、それに伴う損害が大きすぎるものになる。

「明日決着をつける。グリナツドが到着する前にだ。ロフト、魔軍に伝えてこい」

今から約百五十年前、大陸はヴェレツジ帝国とハギア・ルセクス教国とに分かれていた。教国は今とほとんどその領地は変わっていないが、帝国は、王位継承戦争。さらにはルセクス教会の大分裂により、ついに北と西、皇帝教皇主義を主張するヴェネス大帝国と、ルセクスの教皇を正当とするリバレツジ皇国とに分裂した。そして両国間で起きていた戦争を、皇帝戦争と呼んでいる。北方の三国は、元来皇国から独立を許されて建国された国であるため、この戦争は、事実上皇帝戦争であった。

しかし目的が違う。分かれた二つを統一するための戦争は、いつの時代からか、帝が己の利益を露骨に優先するようになった。統治を考えれば、征服した地に住んでいる民は手懐けておかなければならない。なのに帝は何を血迷ったのか、町村を焼き払い、その地にいる全ての民を根こそぎ奴隷として、帝国内へと連れ去った。

これはノークが生まれて間もない頃の話だが、そのついで今、各国の激しい抵抗にあっている。

「ノーク様は、疑問を感じたことは無いのですか」

幕舎の中でロストが唐突に、落ち着いた声で言った。

「何にだ？」

ロフトはしばらく黙って下を向いていた。

解る気がした。ロフトの言いたいことが。自分もこの將軍職に就くまで、いや、就いてからも、今でも迷っている。

「この戦争の意味を」

意味など無い。命じられたことを遂行する、それが軍人だ。そう、逃げてきた。帝国に生まれてきたからには、帝国の軍人として帝国に尽くすだけなのだ。

「自分で見つける」

ロフトがこちらを向いたが、ノークはあえて顔を向けなかった。

この男は帝国軍に入るべきでは無かったのかもしれない。どこか甘いのだ。ノークは内心、峻烈で、疑問を持たない副官を望んでいた。それでも副官としているのは、統率力は群を抜いていて、不正を許さないからだ。

また、逃げた。あいつを副官にしたのは、自分と重ねることが出来たからではないか。自分と同じ疑問を持った者が傍にいて欲しかったからではないのか。

甘さではなく、優しさなのかもしれない。ノークはふと、そう思った。

翌朝、ルゼイラの陣と対峙した。

騎馬隊が一斉に駆けて行く。その後方では、魔軍が第一陣を勤めていた。

ルゼイラの騎馬隊も陣内から迎撃に出てきた。愚かな。圧倒的多数を覆すには攻めるしかない。攻めるしかないが、機会というものがある。

堅陣を敷いていて、攻め落とすには時間が懸かるのではないかと思ったが、機会がいきなり飛び込んだ。

押し潰す。そして帝国軍の威勢を示す。

敵の騎馬隊が四散し、馬止めの柵がはがされていく。矢や法術が飛んできてはいるが弱々しい。

「攻めの手を緩めるな」

伝令が飛んできた。伝令は一度ロフトに伝わり、必要、不必要を

分けていた。伝令を聞いた直後、ロフトの顔色が変わった。

「後方にグリナツド軍が突如出現」

不意に頭を殴られた気がした。後方では土煙が舞っている。

なぜだ。後三日、三日ではなかったのか。しかもよりによってこの時に。何が間違っていたのか。ノークは自分の不注意さに情けなくなつた。

もし、眠っていなかったら。夜を徹して駆けてきたとしたら。ロフトは間違っていなかった。ただ見落としがあった。

「前方の部隊に陣まで戻れと伝える」

後少しだった。

幸い陣は攻撃されてはいなかったが、ノークは将校に囲まれていた。

「私はこの後退が間違いとは思っておりません」

ロフトがノークを庇うように言ったのが、ノークは気に入らなかつた。

「後ろのグリナツドは君たちの、本隊があしらえばよかつたのではないのかな？」

魔軍をまとめている、クナウスが声を上げた。

「たかが七千だぞ。どう考えても本隊が破られることはなかつた」

「万が一、という事態もあるのです。それに」

「それに？」

「グリナツドを率いているのはテトラでした」

「それがどうした」

「この劣勢を覆したいのであればリークやカntlルが出てくるはずですよ。リークの姿は確認されています。なのにテトラだったので。

騎馬の数も少ない。ほとんど見あたりませんでした」

「だから何だというのだ？」

「何か裏がある。そう思います」

馬鹿馬鹿しい。そう言つてクナウスは出ていった。

外がざわついていた。

「竜です。ノーク様」

なぜ竜が。そう思ったが、外に出た。竜は尋常ではない速さで飛んできていた。

「緊急です」

竜から降りた兵は、叫んだ。

「竜を使うほどのか？」

「はい。突如レリビネル要塞、ルシウム間にグリナツド軍五千が現れました」

裏がある。やはりこの男を選んで正解だった。そう思った。

「指揮はリーク。五千はすべて騎馬です」

「そうか。皆に帰還の準備をしると」

「ルゼイラに対しては如何致しましょう？」

「兵を二万伏せておく。それでもこっちは十八万。リークは我らを甘く見ていたようだな」

レリビネルには、一万がいる。

「ここでリークを潰しておく。いや、潰しておかなければならない。全軍でだ」

夜通し駆けに駆けた。グリナツドは動いていない。

グリナツドの退路に、六段の陣を構えた。他に退路はなく、この道を通るしかない。

「不気味だ」

グリナツドの陣が見える丘に登り、陣を見ていた。静寂に包まれている。一段目の陣では、馬止めの柵が作り始められていた。

「慌てている様子などありませんね」

「いや、リークほどの将だ。この程度で慌てるような」

不意に、鐘の音が響きわたった。

「何だ？」

グリナツドの兵が次々に騎乗を始めていた。

不味い。焦り。一段目は柵作りで態勢が整っておらず、他の陣に至っては大半の兵が休んでいた。これを待っていた。始めから。敵

静天遠く

に城を攻めるきなど始めから無かった。

ノークは、すぐ四段目に戻り、指示を出し始めた。  
一段目に、ぶつかったようだ。

五千は急に突撃を開始した。

瞬間、ロフト五百を連れて駆けていた。既に一段目は破られ、二段目も破られかけている。

気付かなかった。いや、気づけなかつた。目的が解らない。正午、城内にいる兵と挟撃を仕掛けるつもりだった。そもそも、なぜグリナッドの本隊がここに現れたのかが、解らない。

これを読んでいた。ルゼイラから引き返してくるのを待っていた。ロフトはそこで、頭を真つ白にした。理由などどうでもいい。今は、敵を生かして返さないことだけを考えればいい。

見えた、敵の先頭。誰も寄せ付けていない。あれが、リークか。四十を過ぎたと聞いてはいたが、十は若く見える。リークを潰す。ノークはそう言った。ロフトは背中に悪寒が走るのを感じた。

笑っている。なぜ、笑えるのだ。戦場という、血生臭い、死がすぐそこにある場所で。

「正面からの激突は避ける。側面を突く」  
リークに対する恐怖がさせた、とつさの指示だった。

小さく纏まった、敵の側面にぶつかつた。そこから断ち切るうとしたが、壁が厚い。しかし幾度かぶつかつているうちに、ついに断ち切れた。敵の勢いが止まりかけた。

馬を返し、再び突撃を試みたとき、不意に敵将がこちらに向かつてきた。

おもしろい。呟き、屈んだ。兜でよく見えないが、色は白く、端正で、目はどこか不思議な感じのする蒼。

剣を振るが避けられ、振られたが防いだ。手が痺れ、汗が吹き出た。敵将は後続に当たらないようにしながら、また駆けてきた。刹那、敵将の兜に矢が当たり、兜が弾け飛んだ。手綱は放していない。戦場だ。剣を、構えた。残念な、終わりだ。長い髪が露わになる。

若い女、初めて解った。敵将の馬が急に速くなり、手に衝撃が走る。刃の上から半分が吹き飛んでいた。

「くそっ」

ロフトはやり場のない怒りを感じた。ただそれを深く感じている暇はない。五千はまだ動いている。大半の兵は既に駆け去っていたが、体勢を立て直したこちら側に進行を阻まれている小隊が、いくつかある。それを一つずつ潰す。

二本目の剣を抜き、声を上げた。左前方に約二十。横に大きく広がり、三方から責め立てた。

「ロフト」

次の隊に攻めかかろうとしたとき、背後から声が拳がった。

「將軍」

「反転しろ、ロフト。リークが戻ってきた。それも五騎だけでだ」  
ありえない。気が狂ったとしか言えない行為。だが好機。

反転し、駆けた。見えた。先頭に立って駆けているリークは、異様な気を放っている。信じられなかったが、背後には本当に五騎しかいない。

さつきはできなかつたが、今ならできる。胸が苦しい。息が荒い。柄を強く握った。

リーク速さは変わらず、躊躇なく駆けてくる。今度こそ。リークと目があう。圧される。異常な圧力。剣を振る。瞬間、空があおかった。

宙に浮いた体は肩から落ち、激痛が走った。

立てない。こんな時に。時が遠くなる。

ロフトは静かに、その体を地に委ねた。

## 空はあおく 二

この隊は誰にも止められない自信があった。自分はその中の一人なのだ、誇りに思った。

この人に付いていけば死ぬことなど無いのだろう。いかに無謀だとしても、付いていける。五百の騎馬が波のように押し寄せる。リークは、その先頭を投げ飛ばした。騎馬が、一瞬怯んだ。横に広がった隊がリークを先頭に敵中に飛び込む。流石に、五百の壁は厚い。だが、勢いが止まることは無かった。

壁を抜けると、次は人の波。その中に孤立した小隊がいた。リークは、これを救うためだけに引き返したのだ。一人でも多く、生き残らせるために。

トウエは、手の甲に付いた血をなめた。背中が、泡立つ。歩兵を蹴散らし、孤立していた小隊を救出した。すかさず、次に向かう。砂埃で前が見えない。それでもリークは駆けていた。その後を必死に追う。位置を覚えていたのだろう。目の前に、勢いを失い、消えかけた隊がいた。

剣を振るのが、必死になってきた。それでもやめない。やめられない。壁を破る。

「これより帰還する。全員、後れをとるな」

帰還。リークの後ろにいたトウエがそう叫ぶと、後ろで次々に同じ声が拳がった。リークが叫んだ、行くぞ。今までに感じたことのない高揚感。必死なんだ、みんな。敵も味方も。だが、生き残るのは自分達だ。

激突。敵の騎馬の数は、確実に増えていた。一人、剣を首に突き立てた。横にずらす。吹き出た血がかかったが、構わない。二人、胸に剣を突き立てた。一瞬、抜けなかったので、思い切り引き抜いた。

それからは無我夢中だったので覚えてないが、気が付いたときは、

既に敵中を抜けていた。敵は追撃を掛けてきている。

「トウエ、クセス。俺についてこい」

急にリークが反転した。トウエもそれに続く。

三騎だけで敵を止めようとしている。無謀すぎる。心臓が跳ね上がる。

やるしかない。つべこべ言わずに。死ぬのが、怖かった。ただそれは、昔の話だ。いつしか、仲間のためなら死ねると思うようになった。それをリークに言ったら、即座に否定された。

それはただの幻想だ。それはおまえが、理由なしで死ぬのを怖がっているだけだ。俺もふと、死ぬのが怖くなる時がある。それを聞いたトウエは、初めてリークの弱い部分を垣間見た気がした。だが、リークは自分の弱い部分を人に見せることができる、強い人だというのにも気づいた。

だが、自分は弱い。だから、死ぬ理由がある。リークは笑っていた。

隘路。道が狭くなった。出口に三騎だけで立ちただかる。数百、或いは、数千の騎馬が迫ってくる。

リークの威圧は尋常なものではなかった。後ろにいても感じる。敵の動きが止まった。数日前の再現。敵はそれを感じたのか、狼狽える。リークが剣を敵に向けた。敵の狼狽えが激しくなり、崩れた。伏兵などいない。

「行くぞ」

狼狽える敵の騎馬を背に、馬腹を蹴った。もう、追ってくることはないだろう。

凱旋。レタール城に着くと、その中は既に祭りだった。

夜、戦勝会が開かれた。

「いつも通り見事だったぞうだな。トウエ」

カntlが隣にいた。カntlは、グリナッド方面の帝国軍を撃退した後、帝国領内にあるセイハス城を落とした。攻城、守城の巧みさにおいて右にでる者はいないと言われている。

「そんなことはありません。自分、はリーク様に付いていくだけで精一杯でした」

「何を。私など付いていくことすらできん」

カナルが、笑った。

「今回は、本当に死ぬかと思いました」

「全くだ。六騎で味方を救出。三騎で数千を食い止めようなど誰も考えん。昔からそうだったからな、あいつは」

「昔、とは？」

「ん？ああ、変革の頃だな、だからもう二十年くらい前になるんじゃないかな」

リークがなぜ変革に参加したかはよく解らない。そもそも、変革自体詳しく知らない。知っているのは、王の権力が剥奪され、権威だけになったということだけだ。今、グリナツドは大臣や官僚、小さな議会で動いている。

「あの頃は私も、いつも先頭に立って駆けていた。今じゃもうそんなことはないがな。知ってるか？あの頃のリークはな」

「昔話はその辺にしておけ、カナル」

「なんだ？聞いてたのか。これからが一番おもしろいところなんだが。そうだ、あの話はどうだ？最初に竜を見たとき」

「カナル」

リークに睨まれカナルは黙ったが、気になる。

「トウエ、明朝リルと共に王都に行け。王や大臣どもに戦勝の報告に行かなければならん」

「私たちは戦後処理がある。トウエ、若いもんは少し羽を伸ばしてこい」

羽を伸ばすつもりはないが、王都にいる兄弟達には会いたかった。明朝、朝日が眩しかった。

### 空はあおく 三

大地が金色に染まっていた。既に刈り取りが始まっている畑もある。

際どい戦いだった。もしかしたら死んでいたかもしれない。いや、何度も死んだ。

兜が弾け飛んだとき、もう少し下にずれていたら、あの矢は、兜ごと頭を貫いていただろう。

敵将の剣が止まった。男だったら、斬られていただろう。

不意に虚しさが浮かんできた。運に助けられたのが、嫌だった。

「確かに、戦場では運に頼ってはいけない。けど、それは頼りない運だろ？」

王都へ行く道中、トウエと話していた。

「そうですね」

「運と言うより偶然と言った方がいいかもしれない」

「偶然」

「戦では、偶然がいくつも重なることがある。偶然に頼ってもいけないけど。それは解るだろ？」

「ですが」

「そんな深く考えなくてもいいと思う。死ななかった。生きている。それだけでいいんじゃないか？」

言葉に、詰まった。遠くを眺めると、木があり、山があった。

「トウエさんは、死ぬのが怖くなるときがありますか？」

やっと出てきた言葉が、それだった。馬鹿なことを聞いた。死を恐れて、戦になるのか。

「正直、怖くなる時もある」

驚いた。戦場で死を恐れるのは、臆病者だけだと思っていた。

「もしそれが、意味のない死だったら。意味のある死は、怖くない。けど、意味のない死は、怖い。敵の追撃を止めようとしたとき、無

謀だと思った。死ぬとも思った。ただ、怖くはなかった。自分が死んでも、それは時間稼ぎになる。その間、幾人もが助かる。仲間のためなら死ねる。自分は弱いから、そう思っている」

仲間のためなら死ねる。それは、信じていいのかもしれない。

「弱いなど」

「いいや、弱い。リークさんに話したら、それは幻想だと、笑われたけど」

仲間を信じているからこそ、仲間のために死ねる。

「リーク様は、仲間を信じていないのですか？」

「そんなことはない。あの人は誰よりも仲間を信じてるし、誰よりも仲間の為に戦う。この間もそうだった。誰も六人で数万の敵に飛び込んで仲間を救うなんてことは考えない」

「ならなぜ？」

「人間は、一人だ。リークさんは、そう言った。その意味は、今もあまり解らない」

レタール城から南西のルアール城へ行き、そこから真南に行けば、王都ミレラームに着く。

ミレラームは大きかった。大きいとは言え、国内の他の城より少しばかり大きいだけで、国外の都と比べるとかなり小さい。しかし、レタールなどの辺境と比べると、賑やかだった。元来、グリナツドの王都はもつと南にあったが、纏めきれなくなった二代前の国王が、トレスゴ公に領土の南半分を割譲したため、元の王都ラルブルクはそのまま公国の都になり、グリナツドの都はミレラームとなった。

五百の兵を城外に布陣させ、リルはトウエと、数人の護衛と宮城へと向かった。

宮城では、儀式的な祝いの言葉が王から述べられた。リルは、儀式的な行事が嫌いだった。

長々しく、しつこい。受け答えはすべてトウエがしてくれているが、自分だったら、発狂しかねない。

「これからどうする？」

儀式的な行事が終わり、解放され、大きく息を吸い込んだリルに、トウエが問いかける。少し悩む。

「兵達に自由にしていいってのは、自分から言っておくよ」 礼を言って、その場を立ち去った。

何もすることがなかった。

太陽が、真上に上がった。午前中はずっと通りをうろついていた。腹が減ったと思いつつ、おいに誘われるがままに、飯店へと入っていく。

「リルか」

「スレイ」

一人の懐かしい友の顔があった。その男は、リルと同じテーブルの反対側に座った。

「久しぶりだな。この城はお前の噂で持ち切りだぞ。戦場に咲く花つてな。誰からも声を懸けられなかったのか？」

「そんな話は聞いたことがない」

「それはそうか。顔を知ってる奴はほとんどいないだろうしな」

スレイは、士官学校時代のリルの、数少ない親友だった。女だからと言つて、敬遠はしない、手加減はなし。だから、話しやすかった。

「お前は、軍に進まないで何をしているんだ？」

スレイは将校の推薦を受けていたが、蹴った。

「今は、城である人の護衛をしている」

「ある人？」

「セプリキア王女」

器官に水がつまり、咳が止まらなくなった。

「の、妹のフィフ様だ」

「貴様、騙したな」

咳が止まらない。昔からだだが、何が言いたいのかが解らない、この男は。

「何だ？そんなに変か」

「当たり前だ。何で軍を蹴った奴が王家の護衛なんだ」

「人間仕事が出来なければ食っていけない。私は、軍だけは嫌だ」

「お前が私という滑稽だな。仕事はどうした？」

「少し交代してもらった」 この男が作る笑顔は柔らかい。言動も、さっぱりしている。リルより二つ年上だが、気軽だった。

「そうだ、王女がお前に会いたがっていた。話を聞きたいそうだが」

「セプリキア様が」

「一緒に行くか？」

会いたかったが、躊躇いがあった。

「いや。もう昔のようにはいかないだろう。身分だってはつきりしてる。それに話すようなことは何も」

「戦の話とかかな。と言うかその話しかできないか」

「どついう意味だ？」

「別に。まあ、仕方ないか。俺。いやいや、私は仕事があるから、ここらで失礼させてもらう」

また、会えるといいな。そう言ってスレイはゆっくりと出口に向かった。

翌朝、思い残すことなく、王都を発った。

レタール城に着くと、リークはいなかったがテトラはいた。

「リークさんは今、カーイン城に行ってる」

城の一室、広くもないが狭くもない会議室で、テトラと話していた。

「処理がある。それくらい私でも解ってる」

「しかしリルは凄いな。そんなに剣が振れて。私は、人並みにしか振れない」

「人並みに振れれば十分だと思っけど」

テトラの歳は二十五。他に誰もいないときは敬語は使わない。

「そうか」

「それより気になることがある」

「何？」

「カーインを奪った。これから積極的に帝国領内を攻めに行くのか？」

「難しいな、それは」

地図を眺めながら、軽く流すように言った。

「確かに、セイハス、クナシラと言った城を攻めれる。けど、攻めればこちらが疲弊する。そこをノークに突かれると痛い。もし奪うのなら、短期間で素早く奪わなければならない」

「帝国領内の収穫高は半端な量ではないと聞いた。それを後盾に籠もられると、短期間では落とせないな」

「その通りだ。それに上手くいったとしても、途中から進めなくなる」

「近衛万軍か」

「そう。百万はいると言われている」

重い、響きだった。グリナッドは、必死に兵を募っても五万が限界で、それ以上増やそうとすると、兵糧の問題が出てくる。

「国力の差が顕著に出てくるな、この問題は」

「しかし万軍は士気が低い」

扉の方から響いた女の声は、妙に落ち着いていた。

「この軍は、ただの壁。大半の者は食べるためか、囚人です」

「クシル。いつからそこに？」

「つい先程」

扉を開けた気配がなかった。うつすらとした笑みを浮かべ、足音も起てずに近づいてくる。リルと違い、肩で揃えられたその黒髪は、明るい印象を与えるが、彼女は、国家の影の部分司る、影部と呼ばれる組織の総長をしている。

「手強いのは中核である十万ほど。ただそれは他の国の侵略に備えるためではありません。ノークです。ノークが怖いのです」

「ノークが怖い。か」

「しかしノークが反旗を翻すことなどないでしょう。不満は大きい

静天遠く

でしょうが」

外で風を浴びると、既に秋の風だった。これから冬がくる。冬がくれば春は待ち遠しい。今年も、長い冬になりそうだった。

澄み切った空から降る雪は美しく、穏やかだった。手が悴んでくるが、ノークは、早朝にこの景色を庭で見るのが好きだった。

秋は終わり、穀物は今年も例年並みの収穫だった。穀物が有り余るほどの生産能力がある帝国は、基本食糧に困らない。職を失くしても農民になるか、軍に入ればとりあえず飢えはしのげる。近年、帝国は流民というものをほとんど出していなかった。

軍議室に入ると、暖炉が盛んに燃えていて、暖かった。

「肩はまだ治らないのか？ロフト」

ロフトは苦笑しながら、今しばらくかかるそうです。と言った。

「春までには、治るらしいのですが」

「そうか。焦るなよ」

「気を付けます。今日は繰り上がって昇格した将校を連れてきました」

四人。ノーク 三十 若いと思わせる者や、既に髪に白い物が混ざっている者までいた。ロフトが順に紹介していき、最後は一番若く見える、かなり気弱そうな青年だった。

「トルナス＝リビルナ。二十八歳。グリナツド方面の総指揮官です」  
既存の将校達が、ざわつく。

「ロフト殿、いくら何でも若すぎでは？」

人事は全て 中央から派遣されてきた者以外は ロフトに委任していた。だから文句はない。だが、その人事が失敗であつたら、責任は自分がとる。

「そんなことはありません。彼の實力は既に証明されています」

「ロフト様、それは買い被りすぎです」

トルナスが、初めて声を上げた。

「そんなことはない。先の戦いで指揮官の死を知り、壊滅と言ってよい状態から兵をいち早く纏めあげ、追撃を阻止したのは、トルナス

殿だ。さらにカーインの放棄を素早く決定し、膨大な量の備蓄品を一も失わなかった」

新人の三人が肯いていた。既存の将校も、大半は納得したようだった。

「さらに」

「もういい、ロフト」

咳払い一つ。

「すみません。少々熱くなってしまいました。私からの報告は以上です」

そのあとは淡々と他の報告が続いた。

軍議が終わり、ノークは意図的に各方面　グリナッド、ルゼイラ、ナスク　の指揮官とロフトを残らせた。

「クラウクセス城は、まだ落ちないのか？」

クラウクセス城は、ナスクの難攻不落の城で、トルナル、レイオンと言った要塞と連携し、帝国を拒み続けていた。

「申し訳ございません。ありとあらゆる手を使っているのですが、クラウクセス城は高い山の上にある。何度も補給線を切ったが、

山自体が穀物庫となっているため、飢えることなどなかった。

「攻めの方法は、任せる。さて、グリナッドのことだが」

静寂が、大きくなる。大きく息を吸い、一気に、吐き出すように言った。

「俺が攻める」

驚く者、然りとした顔をする者。

「ルゼイラはどうするのです？」

「次の一戦でグリナッドを、潰す。グリナッドさえ潰せれば、ルゼイラ、ナスクを潰すことなどなんの造作ない」

「そう簡単には」

「いや、そうでもない。グリナッドは、皇国と共闘条約を結んだ。

こちらが攻めるか攻められれば、皇国がでてくる。出てくるのは多分ラージダル関門のシドル。もしそいつをこっちに抱き込めれば」

皆、息を呑んだ。

皇国と帝国の対立を軸とした秩序の構成は、崩れかけていると感じていた。

軍議は終わり、部屋にはノークとロフトの二人が残った。

「ノーク將軍、願いがあります」

「何だ？」

「征服した土地の民のことですが」

「解っている。たとえ上がなんと言おうが一人たりとも帝都には送らん。略奪も許さん。ただ」

問題は、魔軍だった。戦場ではノークの指揮下に入るものの、それ以外の時は自由行動権が認められていた。それも帝王の勅書を持つているため、手が出せない。

「難しいですね。余計な血を流したくないものです」

それはノークも同じだった。帝王のために戦ったことはない。今の帝王に、忠を誓ったこともなかった。今の君主に誓う忠などない。と考えていた。言うなれば、帝国という、国そのものに忠を誓った。しかし、次の君主が愚かでなければ、考え方は変わるかもしれない。

「本当に、良いんですね？」

「何がだ？」

「グリナツドを潰して」

しばらく、黙っていた。グリナツドという国自体は惜しくも何ともない。リークが、惜しかった。

「もしここで潰れれば」

「二度と戦えない。と言う訳でもないだろう」

リークは、心の師と言ってもよかった。会ったことは一度もない。が、今の自分があるのはリークがいたからだ。リークに対する、憧憬、尊敬と言った感情が、二十年前の自分に浮かび上がってきたのは、リークが変革の時、名も無き一人の少年から、大陸全土にその名を轟かせるようになったからだ。それに触発され、軍に入った。

今思えば、単純過ぎる理由で何とも言えないが、昇るところまで昇り詰め、今、この將軍という位にいる。

憧憬や尊敬の気持ちは今も変わってはいなかった。

「皇国の將の抱き込みは、慎重にな。影部に見つかるなよ」

「影部に気付かれなければ何ら難しいことはありません。それが難しいのですが」

影部には、かなり前から悩ませられていた。潜入から、攪乱、暗殺までする組織だった。その規模は未だに掴めていない。多分、それを知っているのは、リーク以下数名だろう。しかもどこに潜っているかも解らないため、手の打ちようがなかった。帝国にも裏の組織はあるが、影部には遠く及ばなかった。

「計画が露呈しても、グリナツドから撤退ということはない。数で押す」

ロフトは頷き、静かに、部屋を出ていった。

なぜ俺は、戦っているのか。今まで何度も、自分に問い聞かせてきた。帝ではなく、国に忠を誓ったとしてきたが、帝と国は、イコールで結ばれる存在だった。単に戦いたいただけなのかもしれない。強い者と戦い、越える。越えたいだけなのかもしれない。答えを見つげるために戦っているのかもしれない。

兵を叱咤する、ロフトの声が響いていた。

未だ解らぬまま 二（前書き）

徒・・・かち。歩兵のこと。

静天遠く

## 未だ解らぬまま 二

戦場の花と呼ばれることを、彼女はあまり好んでいないようだった。

自分でもそうだろうと思いつつ、クセスは身を屈めた。

春、雪解けと共に帝国は侵攻を開始した。およそ十六万の大軍で、対するグリナツドは、四万。両軍はカーイン城の北東にある、荒野で対峙した。

開戦から一刻 三十分 ほどたったが。戦が動く気配はなかった。主戦場の東に小高い丘がある。その丘を取られれば、勝敗は決すると、リークは言った。取っても、勝つとは限らない。何せ敵は四倍の大軍だ。ノークもいる。しかし圧倒的優位に立てる。

先に、丘の頂に立った帝国の騎馬隊が、クセスの騎馬隊に突撃を開始した。敵の数は二千ほどだろうか。対するこちらは、五百。

「リルさんは横から敵にあたってください。私は、正面から受け止めます」

リルの声が聞こえた。

右手に槍を持ち、手綱を口にくわえ、左手で剣を抜き放った。頭はあまり良くなかったが、力は強かった。

ぶつかる。槍で貫き、剣で切り裂く。

「舐めるな」

そう叫び、敵の中を駆け回る。戦場ではいつも、女も何も関係ない、と叫びたかった。

リルが横槍をいれると、敵の隊列は乱れた。後一押し。だが敵の数は多く、徐々に勢いが落ちてきた。押せない。一度、渦中を抜ける。

「厳しいですね。数が多い」

「でも、勝てないわけではない。三隊に分けます」 敵は再び頂に登り、横に広がった。一気に囲い込むつもりらしい。

「数以外ではこちらが上です。中央の第一隊は一端下がり、第二隊、第三隊で両翼を端から押します」

敵が逆落としを再開した。少しずつ、後退する。敵の勢いが最高潮に達したとき、両翼に第二隊、第三隊がぶつかった。

「反転」

勢いが余り、突出した中央にぶつかる。敵は横に広がりすぎていたため、壁は薄かった。すぐに敵中を抜け、今度はこちらが頂に登った。

「小さく纏まれ」

今度こそ。一撃で。

突撃を開始した。敵以上の早さで、駆け降りる。既に戦意は無かったように、ぶつかる前に敵は逃げ始めた。

「旗を掲げよ」

鯨波 とき を上げよ。とリルが続いた。

陵の頂からしたの戦場を見下ろすと、両軍は入り乱れ、大乱戦となっていた。

グリナツド四万の魚鱗に対し、帝国九万の鶴翼。さらにその後方に三万の方陣。帝国はグリナツドを包み込もうとしているが、軽騎馬にその動きを阻まれ、グリナツドは鶴翼の屈折点を崩そうとしているが、数に阻まれている。ただ、東翼 丘の方角 は、グリナツドが帝国の動きを完全に拘束していた。

丘を取ったことで、帝国が動揺しているのが、はっきりと感じられた。

クセスは高々と槍を掲げ、下の戦場を指した。

馬腹を蹴り、駆け降りる。初めはいかに威圧を掛けるかで横に広がっていた騎馬隊は、ぶつかる直前、一つの固まりとなった。

敵の徒を、叩き斬る。今まで全ての力を内に向かわせていたため、外に対する力は無に等しい。それが、鶴翼だった。

敵はまだ崩れない。もう一度。そう思ったとき、敵の騎馬隊が正面から向かってきた。槍を、投げれ。その槍は、敵の先頭の額を貫

いた。そのまま、突撃。突き出された槍を奪い、首を斬る。槍の柄で敵の頭を叩くと、敵の頭は砕け、槍は折れた。

右頬に返り血を浴びた。口の中が鉄臭い。ふと、昔を思い出す。父に本気で殴られたときも、こんな感じだった。あの時の父は、怖かった。あの時は、私が悪いのだから仕方ない、と思った。

しかし今は、こうして国を守っている。死ぬことが当たり前の戦場で、仲間と、家族がいる国を。だから、意味のある戦いで死ぬことを、間違いだとは思っていなかった。

死んだら、誰か悲しんでくれるのだろうか。誰が、涙を流すだろうか。軍人の死として悲しんでくれるかもしれない。それで、良かった。

両軍とも決定的な打撃を与られないまま、自然と引き分けの形となった。後退時も、気は抜けない。

北東二十里 十キロメートル 離れた場所に、帝国は陣を張った。夜半、群議が開かれた。

「まずは皆、善く戦った。しかし勝ってもない。負けてもない」  
一同を見回すと、それほど重い空気ではなかった。

「クセスとリルが善くやってくれた。丘を取ってはくれたのだがな」  
今日勝てなくても、次は勝つ。リークは続けた。皇国から援軍が出たそうだ。六万。これで数はほぼ拮抗。後は連携が巧くいくかだ。

「他、何かある者は」  
何もなかった。

「では各個、次の戦いまで気を緩めるな」

翌朝、目が覚めると、背筋が凍った。何か起きたわけではない。ただ単に背筋が凍った。こういう日は何か起きる。吉兆ではなく、凶兆。こんな時に、何が。誰かが死ぬのか。それとも自分か。それとも。そこで考えるのをやめた。これ以上、考えたくなかった。

「どうしたクセス？ 顔色が悪いぞ」

トウエがクセスを一目見て、言った。

「ああ、別に何でもないんだけど。そう、見える？」

「まあな」

「そう。別に、本当に何でもないんだ」

気を付けるよ。そう言っただけで去ろうとしたトウエを、引き止めた。

「背筋が凍るとき？なんだそれは」

馬鹿なことを聞いた。自分で少し、恥ずかしくなった。これは、

他人には理解できない感覚なのだから。

「そうだな。例えば、リークさんと対峙したときとか。あれは凄まじい。動けなくなる」

その後も、トウエは淡々と語った。

「やっぱり、そんなもんだよね」

早く、この場から立ち去りたくなっていた。

「ああ、もう一つある」

「何？」

「お前を見たとき」

少し、心が跳ねた。

「血まみれの、お前を見たときだがな」

「なっ」

馬鹿だと思った。トウエに何かを期待した、自分が馬鹿だと思った。

「あれはかなり怖かった。昨日の話だがな。お前、少し笑ってたぞ」

次の言葉を言おうとしたが、伝令が飛んできた。緊急収集。悪い

予感、これかもしれない。

その予感は、見事にあたった。

皇国が、裏切った。全く、予測していない事態。あまりにも信じ

られない事態に、驚くより、呆れた。しばらく、何も考えられな

かった。

「帝国に釣られたらしい。ラージダル関門のシドルだ」

そんな馬鹿な話があるか。帝国と皇国の対立は、絶対だったはず。

なのに、なぜ。

「ノークが、一枚上を行っていたようだ。時代の秩序は、崩れた

わけだ」

異様なまで重苦しく、そして、静かだった。クセスは、皆のこの落ち着きようが、気に喰わなかった。家族はどうなる。友人はどうなる。国は、どうなる。

「戦だ、何が起きてもおかしくない」

小さな声で、トウエがクセスに言った。今すぐにも、一人だけでも、駆け戻りたかった。

「その情報は確かなんですね」  
テトラだった。

「影部が竜に乗って伝えてきた。これはよほどの事だ。シドルは、五万と一万に分け、五万をルアル郊外に布陣させ、一万で閲兵を申し出た。早朝、門が開いた一瞬の隙を突いて城内に流れ込んだ」

左の、親指を噛んだ。血が滲み、口の中に広がる。

「カーインは放棄する。今から少しずつ、帝国にはれないように兵をレタールに走らせる」

そう言ってリークは、目を閉じた。そして、言った。すまない。

俺が悪い。俺の、時代を見る目が無かった。変革の時に、気付くべきだったのかもしれない。俺は、お前達が今まで何も言わずに付いてきてくれたことに、感謝している。だからこそ、お前達の悲しむ顔だけは見たくなかった。だが、泣き寝入りするつもりもない。

「国は無くなったと言っている。お前達を縛り付ける物はなくなつた。俺は引き止めない。去りたい者は、去れ」

意味も無く、涙が溢れた。リークは、同情を誘っているわけではない。リークが、同情が好きではないことは、誰もが知っている。涙が、止まらない。

誰も、動かない。

「ならば皆、心得よ。次が、最後の戦だと。クセス、最初に行け」  
返事はしたつもりだが、声になったかどうかは、解らなかった。

## 通り過ぎる風 一

レタールまで、一直線に駆けた。

レタールは皇国に囲まれていたが、一度ぶつかると、皇国は傾れを打って潰走し始めた。これほど早く戻ることは、誰も予想してはいなかっただろう。

レタールには、カntlがいた。

「お前がいて、本当に良かった」

リークは、シドルの首を討ち取ることだけを考えていた。

「私が役に立つのは、城か城の近くにいるときだけだ」

「今回は、それがいつも以上に嬉しい」

グリナッドという国は、実質、滅んだ。だから、兵卒達にも、去りたい者は去れと言った。半数が、抜けた。故郷に親が居る者。今のこの状況を信じきれない者。理由は様々だったが、二万は残った。正直、もっと減るかと思っていたものだから、嬉しかった。

「これからどうする？ここに籠もるか？」

「籠城は、援軍が来ることを前提として成り立つもの。それは、お前が一番よく解っているはずだ」

ルゼイラからの援軍は、あてにしていなかった。来るはずがないし、来たところで既に手遅れだ。

「王族の行方も解らずか」

「ああ、もう首を落とされたかもしれないが」

「直、帝国が雪崩込んでくる。国は滅んだ。俺達の存在意義はもう無い。だが」

諦めたつもりはない。何を諦めてはいないのか。この国を守ることをか。この国の再編か。生きることをか。否、シドルの首をはねることを。その後のことは、考えてなかった。

「俺は、ノークに負けた。だが悔しくは無い。一度も会ったことはないが、あいつに何かを感じた。魔軍の邪魔さえなければ、ノーク

にはグリナツドだった場所を任せても大丈夫だろう」

帝国は、この大陸のどの国よりも豊かだった。これ以上豊かさを求める必要がないほど。ノークは、南の国々への中央の介入を許さないだろう。

「明朝、ルアールまで駆ける。細かい取り決めなどいらぬ。目指すはシドルの首一つのみ」

自分は、どこか、甘かった。全てを事態を想定し、計画を練ったつもりだったが、一つだけ、抜けていた。同じ宗教の国までも敵になるということだけが、抜けていた。時代に遅れていた。いや、目を向けなかった。向けようとしなかった。そしてこの結果だ。取り返しのつかない、結果になってしまった。

翌朝、門を開け放ち、馬に乗った。

城内は静かだった。兵も、将校も、ここにいる住人達までも、何一つ音を立てない。

この緊張感を感じるのも、最後かもしれない。しかし最後にふさわしい、緊張だと思った。

「進発」

声が響いた。

騎馬を先頭に整列させ、駆け始めた。三千の騎馬と一万七千の徒で、シドルを討ち取る。

両脇には、今まで共に戦ってきた将校達がいる。変革の頃と比べると、今は若い将校達が中心となっていた。変わってないのは、自分とカンルぐらいだ。皆、帝国との戦いで死んでいった。俺達だけ、帝国ではなく皇国か。残念だ。

旧友達よ、俺は、おまえ達と共に築き、守ってきた、この国を滅ぼした奴を討つ。

前方で敵が陣を組んでいた。柵の間から、一斉に矢を放ってきた。ほとんど何も考えていなかった。突き出された槍を払う。柵が次々と引き倒され、そこから敵中に切り込んでいく。

「邪魔だ」

山が揺れているようだった。敵は、押され始めている。あまりの威圧に、既に浮き足立っていた。

血と汗が混ざっている。ただ前だけを見ていた。後ろを見る必要などない。誰も、失うものは、もうないのだから。

首を飛ばした。飛ばした先には、槍と櫓が林立していた。壁はまだ厚い。しかし、怯む必要などない。止まる必要などない。

矢が膝の横に刺さった。それで、目が覚めた。息苦しさを、感じなくなった。

突き出された槍をはじめ、叩き斬る。敵の騎馬隊が向かってくるが、全て斬り落とした。

押しまくっている。皇国があわてて中央に兵を移動させているが、もう遅い。

敵の壁が、薄くなっていくのが感じられた。

敵陣が崩れ始めた時、気付けば、太陽は傾き始めていた。

まだ、これからだ。そう思った瞬間、馬が潰れた。背中から地面に落ちる。体が動かない。馬を。と叫ぼうとしたが、声が出ない。

「リークさん」

最初は誰か解らなかったが、クセスだと解った。腕に矢が三本刺さっていた。

「まだだ。まだ。終わってはいない」

やっと出た声は、掠れた声だった。もう無理です。だから、静かにしててください。そう言ったクセスの声は、震えていた。

生き残ってしまった。死ぬつもりだったが、死ねなかった。

しだいに、リークを中心に兵が集まってきた。傷を負っていない者はいなかった。ほとんどの将校は生き残っていた。

もう、立ち上げれる。

しばらくして、クセスが戻ってきた。

「リル、さんが」

「どうした？」

クセスの声と表情から解ってしまったが、聞いた。

「行方、不明です」

必死で涙を我慢しているのが、解った。そしてその場に座り込んで、声を上げずに泣き出した。

戦争だ。戦争なのだ。しかし、その一言で片付けてしまうには、あまりにも重かった。俺は、何も守れなかったのかな。

空を、仰いだ。何事もなかったように、いつものように、赤かった。

これから、どうするかな。将校達が、リークの前に集まっていた。生き残った兵は一万と少し。全員、最後まで諦めなかった。

「軍は、ここで解散する。家族がいる者は、帰れ。これは個人的な願いとして聞いて欲しいと、兵達には伝えてくれ。お前達もだ」

「帰る場所のない俺達はどうするんです？山にでも籠もって、山賊でもやりますか？」

トウエが、わざと明るい声で言った。しかしそれでも、少しだけ楽になった気がした。

「馬鹿を言え。お前達は、まだ戦いのだろうか？」

皆の顔が、引き締まった。

リークは立ち上がり、一息ついた。

「なら、行こう。俺達は戦場を求め、戦場は俺達を呼んでいる。そんな、気がする」

「どこへ、ですか」

簡単ではないかもしれない。しかし、生き残ってしまったからには、生きていかなければならない。投げ出すことは、許されない。

「共和国へ」

風が、通り過ぎた。

## 通り過ぎる風 二

始めは何が起こったのかが解らず馬に乗ったが、次第に見えてきた。

城内に兵が入ってくることは良くあるが、この兵の雰囲気は異常としか言いようがなかった。城内は乱れに乱れている。あちこちから、叫びや鳴き声、怒声が飛び交っている。

騒ぎが始まったと同時に飛び出し、大通り駆けた。ここから宮城までは、すぐだった。

宮城の入り口を、兵が固めていた。

剣を抜き、馬から飛び降りた。その勢いを利用して、敵を斬る。

これは明らかに、皇国の兵だった。

剣を一振りするごとに、二、三人が次々と倒れていく。宮城の中へと、走った。馬が付いてくる。

第二王女を救わなければならないと考えたのは職柄で、王族に忠誠など無かった。だから軍を蹴ったのかもしれない。そう思いながら、敵の斬り倒していく。

「スレイ。こつちだ」

声は、敵に囲まれていた。囲みを破ると、そこには王女セプリキアとその妹ファイフ、護衛隊長のネイト、さらには給仕長のラブノルトまでが槍をふるっていた。

「おやおや、給仕長が槍を振るって話は聞いたことがない」

「そのようなことを言ってる場合ではありませんよ」

敵がまた、囲み始めた。

「スレイ」

ファイフが目には涙を溜め、名を呼んだ。

「大丈夫ですよ。安心してください。入り口に私の馬があります。

ネイトさん、ラブノルトさんどっちでもいいんだがそれに乗ってください」

「解った。後ろは任せろ、スレイ」

安心して一步、進んだ。敵が、一步下がった。また進むと、また下がった。

「どうした？怖じ気付いたか」

構えを解く。後ろで将らしき人物が騒いでいた。その将らしき人物は剣を抜くと、自らスレイによって来た。が、スレイの拳を顔面に食らうと、将はよろけ、兵の中に倒れた。誰も支えようとはしない。その瞬間、スレイはフィフの体を抱き上げ、囲みを斬り抜けた。他の三人も付いてくる。

馬にはネイトと王女とその妹が乗った。ラプノルトは、給仕服のため乗れない。

走る。良い馬であり、日頃から乗っているので、女三人乗せたところで潰れはしないだろう。

他の護衛達はもうやられただろう。スレイが非番で宮城を離れていたことが、不幸中の幸いだった。

また、敵の壁。しかも今度のは分厚い。

舌打ち。剣を振る。ほとんどの兵が何もできないまま、倒れていく。しかし数が多い。腕を上げるのが辛くなってきたが、まだ振れる。

気が付けば、前にも後ろにも兵がいた。

囲まれた。完全に。どうする。敵の、一角が崩れた。

普通の戦い方ではないことは、見れば解る。敵の中を掻い潜り、確実に急所をその短剣で斬る。何も考えずに、そこから斬り抜けた。長らしき、一人の黒髪の女が近づいてきた。

「南門は私たちが確保いたしました。あなた方はそこから逃げてく  
ださい」

「どこへ？」

「トレスゴ公国へ」

そこからは、何も考えずにがむしゃらに走った。  
気が付けば、夜だった。

「この辺で、しばらく休みましょう。少しだけですが」

一息つき、木の根に腰を掛けた。今現在の位置は、解らない。軍は、救援に来るのか。しかしあの女は公国へ行けと言った。それは一時的に避難せよということか。それとも、グリナッドは終わったからということか。

自分が今なぜここにいるのかが、不思議になった。後者なら、国が潰れたのなら、自分はここにいる必要は無いのではないか。ネイルなどは王族に対する忠誠が厚いが、自分は無に等しい。ならなぜ、あの時助けに行ったのか。なぜだろう。

太陽が昇るよりも早く、出発した。急げば、一日で国境を越えることが出来るだろう。途中、グリナッドからトレスゴに移動している難民に合流した。

こうなれば、王族も哀れだな。今までずっとぬるま湯に浸かってきた王族だから、一層哀れに見えた。

次の日、すぐに国境に差し掛かったが、公国の軍が国境を固めていた。

先頭では、揉め事がおきている。

難民は増え、一日で八万人を越えた。少しばかり食料が送られてきてはいるが、少なすぎた。この数の難民が、一斉に公国内に雪崩込んだらどうなるか。混乱が極まることには間違いないだろう。

そろそろ、行くか。どこへ。どこかへ。

「どこかへ。いくおつもりですか」  
ラプノルトだった。

心臓が跳ねた。溜め息をついて、答えた。

「正直に言えば」

「そうですね。いえ、止めはしません。国は滅んだのですから。私としては、残っていた良かったのですが」

無理にでも止めようとしてくるかと思っていたから、少し、驚いた。

「変な意味はありませんよ。唯一の男手がなくなるのは厳しいと

申しているのです。それに、フィフ様は」  
「あんたらはまだ若いだろ。それに、男みたいな女が一人いますよ」  
無理矢理、ラブノルトの話の切った。その話題は、話したくなかった。

翌朝、まだ難民達が静まり返っている頃、馬に乗った。

馬に乗りながら、あのとき助けてくれた女は、誰なのか。そんなことを考えていた。

### 通り過ぎる風 三

椅子に座りながら頭を抱えていた。

無理にでも、引き止めるべきであった。しかしもう遅い。

言葉が出てこない。いくら言っても、奴が行くと言い張って、話を聞かなかった。部隊の編成も、奴が中心にやると言った。その時気付くべきであった。

あの日以来、数日前のことだが、まだ、寝むれていなかった。腹の底から怒りが沸くというのは、このことを言うのだらう。あまりにも激怒したため、腹に穴が空いたようだ。腹が痛かった。その怒りの抜け道が無いため、その怒りは内で暴れ、痛みがますますひどくなっていた。

「大将。シドルが、戻って参りました」

真夜中、今日も眠れぬ夜を椅子の上で過ごそうかとしていた。

すぐさま部屋を出て、外壁に上がった。見下ろせば、いくつかの松明に照らされた、シドルがいた。

「アルヴァーノ、門を開けてくれ」  
情けない、姿だった。

「貴方からその名を呼ばれる筋合いはもう無い。貴方は、国を裏切った」

「私は大将だぞ。アルヴァーノ」

「貴方は何を言っているのだ。部屋を調べさせてもらった。これは何だ。何の手紙だ」

口調が、強くなっていく。シドルは、狼狽えるだけである。

「統治省に書類を全て送った。それと今の大将は貴方ではない。私だ」

「だが」

「まだ言うか。去ね。それが嫌なら、死ね。それとも私が、殺してやるつか？」

そう言い、弓を取り出した。今奴を討てば、腹の内の怒りが流れ出るかもしれない。

「貴方に、皇国の地を踏む権利は無い」

矢を引き絞り、放とうとした。しかし、馬に乗った何者かが、逃げようとしたシドルの首を飛ばした。その何者かは馬から転げ落ち、突然、笑いだした。

男か女かの区別すら付かない、笑い声だった。

「大将殿、あの女が目を覚ましました」

結局、あの何者かは笑いながら気を失った。

女だった。具足を着けていたため、軍人だとすぐ解った。旧グリナッドの将だろう。グリナッドの女の将と言えば、リルとクセスが有名だが、実際見たことがないので確定は出来ないが、多分前者だろう。

今は病室にいる。

改めて見ると、それは少女と言って良かった。しかし、目はしっかりしている。

まいったな。そう思い、名を訊ねた。

「リル＝リファードと申します」

その少女は床から起き、地に膝をつき、頭を下げた。

「無理はするなよ。あんたは、まだ病人なんだ」

横にいた、レブンが声を掛けた。この男は、誰とでも親しくすることが出来る。初対面でも、違和感がない。

「いえ。気を失ったところを助けていただきました。その助けをいただいた方々に対し、礼を失することは、私には出来ません」

おやおや。レブンはそんな顔をした。

「好きなようにすればいい。唐突だが、聞きたいことがある」

「は」

「なぜ、一人だった？」

「はい。皇国が崩れた時、私は本隊と離れた場所にいました。こち

ら側の攻撃が終わったとは気付かずに、崩れていく皇国軍を追い続けました。いつしか私は、一人になっていました」

そこで一度、話が途切れた。レブンが水を差し出すと、礼を言い、リルは一口で飲み干した。

「しかし見つけたのです。シドルの姿を。初めは数騎に囲まれていましたが、次々と倒れていきました。そこから何日追ったか解りません。馬も私も、最後の一力が出ませんでした」

「そして斬った」

「はい。申し訳ございません。勝手に、斬ってしまい」

「何も謝ることはない。どの道、あの男は死んだのだから」

リルが、うつむき、頭を上げなくなつた。泣いている。

これが、国を無くすということだ。あの男は。シドルは、つまりぬ人の欲で、この少女の国を奪つた。そしてその少女が、シドルを葬つた。しかし何も戻つてはこない。あるのは、虚しさ、悔しさだけ。

昔から帝国の驚異を説いてきた。しかし、中央は何の反応を示さぬまま、金と権力に溺れていた。

ついに領土が接するまで、帝国は大きくなつた。皇国は何も変わつてはいない。このままでは確実に、帝国に潰される。

皇王を守るために、様々なことを考えた。いくら腐ろつが、皇王は皇王だ。

「後一つ聞きたい。この裏切りがシドルだけ。つまり皇国が帝国に手を貸したわけではないことは、いつ知つた？」

リルの頭の中で、皇国が裏切つたことになっていれば、この場で暴れかねない。

「勘。です」

「勘？」

「はい」

「勘とはな」

しばらくここにもかまわないことを伝えた。リルは頭を下げ、

アルヴァーノは部屋へ戻った。

配下の三千を率いて訓練に出ることは、珍しいことではなかった。五百の騎馬と、二千五百の徒。それらを攻めと守りに分け、交互に何度もぶつかりあうことを繰り返した。

レブンは、緊張していた。これから始まる帝国との直接対決のことを考えると、血が騒ぐ。

しかし実戦の経験は乏しい。賊の討伐はよくあるが、対外戦争はしたことがない。ここ百年の間、皇国は皇帝戦争を、三国に任せきりだった。自分がグリナツドの前線の救援に出たいと、アルヴァーノには何度も言った。アルヴァーノは、援軍の指揮は私が執る。その時は、お前を連れていくと言った。だが、統治省が、救援には消極的だった。

グリナツドがカーインを陥とすと、統治省は少しは動く気になった。そしてアルヴァーノの必死の説得に、動いた。

しかし行けなかった。シドルが行くと言い出した。言い出すと何も聞かなくなるので、結局、アルヴァーノは諦めた。編成はシドルとその副官で決めた。そこには、アルヴァーノも、レブンの名も、載ってはいなかった。

そしてあの結果だった。皇国軍は無惨なまでに引き裂かれ、シドルの首は飛んだ。当然の結果だと、思った。

しかし六万という数は問題だった。ラージダルにいた兵の、三分の二だった。誰一人戻ってきていない。これからだろうか。下級の将校が大幅に入れ替わるらしい。

「どうした兄。気分でも悪いんかい？」

弟の、エルブだった。

「うん？何、ちよつとした考え事だ」

「そうか。兄は昔から考え事が好きだからな。俺には理解できねえよ。ところで、日が落ちる前に帰ろうぜ」

「今日は、野営はなしだったな」

原則として明日は休みだったので、野営は無しだった。調練を切り上げ、関門に戻った。

休みの日、部下は休ませても、レブンとエルブは休まない。朝日と供に起き、広場でしばらく打ち合いをする。

関門は、五重になっていた。端を外壁。中を内壁。そして内壁の内側は、中央壁と呼ばれていた。一般人は住んでおらず、住民は全て、兵と軍人だった。

広場には、レブンが先に着いた。

馬がいた。人もいた。

「体は、もう平気なのか？」

「これは、おはようございます。レブン大佐。体は見ての通りです。大した怪我は負っていなかったようなので」

「ならばよかった」

少し、気まずい。ここ数年、女という生き物と話さなかったこともあるだろう。この関門にいる唯一の女であった。

「レブン殿」

言った、リルの方を向いた。

「私は、戦いたいのです」

言おうとしていることは、何となくだが、解る気がした。

「どうすれば、よいのでしょうか？」

そう言っただけを向いたリルの顔が、妙に色つぼかったので、今度は、気恥ずかしくなった。

「大将に言ってみる。決定は統治省と言うところが下すのだが。あなたなら、承諾されると思う」

「おや？兄、誰だいその美人さんは？」

エルブが馬を曳きながら、からかうような目をしていた。

「さては。兄、なかなかやるな」

「馬鹿を言え。ここに民間人はいない」

「そう言われればそうだな。じゃあ誰だい？」

「リル殿だ。旧グリナツドの」

エルブはなるほどという顔をした。

「噂の。女で軍人だと聞いたからどれほどいかついのかって思ってたんだが、こんな美人とは思ってもいなかった」

「弟だ、リル殿」

リルが、エルブに頭を下げた。

「では、私はここで」

リルはそう言い、戻っていった。

「さて、始めようか」

今日も、快晴になりそうだ。

いつものように呼び出され、宰相の屋敷へと向かった。

屋敷の門をくぐると、庭にはたくさん春の花が咲いていた。

綺麗だ。しかし、すぐに散るだろう。いや、花にとっては、散らなければならぬのかもしれない。

花は知っている。永遠が美しくないことを。そして知らせている。永遠に咲き誇ることなど、人間の利己的な考えでしかないということとを。

客室で少し待たされ、宰相の部屋へと案内された。

「ノークが、造反の輩ではないかと主張する者が絶えんのだよ。ライル」

そんなことはなかった。確かにノークは今の帝王に不満はあるだろう。しかしノークはそれだけの理由で帝国に逆らうほど浅はかでないことは、自分が一番知っている。

「何度も言いますが、それは中央とノークの、帝王と国との関係の認識のずれです」

「それは、何度も言った。所詮自分の身が可愛いだだけの者どもなのだが。それに、今回の戦のやり方にも文句を付けている者もいる。皇国の協力を得ただのと」

「それは、仕方がないでしょう。戦争には、常に駆け引きの渦が巻いております。それに時代は動いているのです。信仰心など、あの地域にあるかどうかもわかりません」

「私はノークを信頼している。だからこういった声は、大きくならないうちにもみ消してしまいたい」

髪には、白いものが混ざり始めていた。それは年々増えている。

この初老の宰相が、今までどれだけ汚れてきたかは知らない。しかし、今の帝国をまとめているのは、この老人なのだ。

「画策と実行は、ロフトと聞いたが」

「その通りです。ロフトは元々、官吏を志望していました。なので軍人でありながら、軍人とは根本的な思考が違います。まさか皇国の将を引きずり込むとは、誰も思っておりませんでした」

「計画は成功した。ノークは征服した国を四分し、人を置いて納めさせるらしいな」「競わせるつもりなのです。その四人を。いかに素早く人心を掌握できるか。年齢が近い四人を選ばらしいのですが」「使用人が茶を煎れた後、ジルトは人払いを命じた。

「そろそろ、本題に移ろうか」

「それほど重要なのですか？」

「そうだ。国の行く末を左右する民族のことだ」

「北の」

「そう。ライグル族のことだ」

ライグル族は民族意識が高く、帝国領に入り、自治を認められても、あくまで独立を叫んでいるため、不穏な空気が絶えなかった。

「何か動きでも？」

「ちょっとした、予兆かもしれぬが、思い過ごしかもしれない」

茶をすすり、一息いれる。

「実は最近、ライグルの地で穀物の密売が相次いで検挙されておる。基本帝国では塩、鉄以外のものを売るのは自由だが、穀物は許可を得なければならぬ。

「それが何か」

「ふむ。出所は余剰穀物だ。しかし行き先はどこだと思う？アリアス島だった」

アリアス島。皇国の北。帝国の西。旧グリナッドの北西に位置するその島は、断崖に囲まれ、複雑な暗礁が迷路のように取り巻いているため、小さいが帝国が制圧に手間取った場所だった。

「何の、関係が」

「それがわからぬから、思い過ごしかもしれないのだ」  
「しかし思い過ごしでなかったら、これは大変なことです」

アリアス島は小さな島だが、島そのものが要塞のようになってい

るため、もしここで武装勢力が蜂起すれば、鎮めることは難しい。

「しかもどこを通ってあそこまで流れ着くのかはわからなかった。もしかしたら、想像以上に、複雑な道なのかもしれない」

「ライグルとアリアスの一斉蜂起。それを考えると」

「恐ろしいことだ。特にライグルは、帝都に近い。いくら近衛万軍がいようと、奴らは湖を使うかもしれない」

帝都の北と東に伸びたその湖は、リア湖と呼ばれている。

「今懸命に調べてはいるが、もしもの時の対策を、副官であるおまえに任せる」

返事をし、その日はそれで終わりだった。

翌日から、対策を考え始めた。まずは、各地域の物流を調べるところから始めたのだが、一般の政務の後にするので、なかなかはかどらない。

「これは一昨年の資料です」

補佐の一人のタージルが書類を抱え、机の脇に置いた。

「何か、わかりました？」

「少しな。これを見てくれ。昨年のだ。少しおかしな箇所がある」

「おかしな箇所？」

「どうも、これを見る限りライグルからここへ流れているようなんだ」

「そう言えば、一見しただけでは、不自然とはわからないようになっていきますね」

「ここからどこへ流れるのかが解らない。道が、消えてるんだ」

「つまり各都市の官吏に協力者がいる」

「その可能性が、今一番考えられる」

前から、商人が報告書に記載しない、闇穀が問題となっていた。そのせいでもあるかもしれない。

「対外戦争は十分に耐えられますが、対内となると」

「難しいな。有能な将軍がない。鎮圧は難しい。話は変わるが、私自身、お前はどう思っているかは知らんが、諜報の組織が欲しい」

静天遠く

「それは  
よい考えです。ターゲットが、語り始めた。」

## 渦二

湖に霧がかかっていた。

この景色が好きだから、毎朝ここに来ている。何が好きなのかは、自分でもよくわからない。

好きなのだ。

馬に乗り、しばらく湖の周りを歩いていると、霧の中に一人の人影があった。

漁師かと思つたが、軍服で、見知らぬ顔だった。

「俺は、この景色が好きだ」

リーグルは、驚いた。突然声を掛けられたからではない。自分以外に、この霧の湖を見るためだけに来ている人間がいることに、驚いた。

「私も、好きです」

好きなら、良いのだ。それだけで、わかりあえることもある。

しばらく二人で、湖を見ていた。

「今、この共和国は霧中だ」

霧が晴れてきた頃、男は言った。

「ちょうど、俺たちのように」

いつの間にか、霧は消えていた。向こう岸まで、はっきりと見える。

「だが、霧はいつか晴れる」

男が、顔を向けた。

「見えなかったのが、見えるようになる。いや、目をそらしていたが、無理矢理見せつけられた。そんな感じかな。そう思うだろうか？  
リーグル」

「なぜ？私の名を」

男は湖の方を向き、目を細めた。

「この状況が理解できる数少ない将校だ。一目見ればおぼえる」

この男はリークだと、確信した。  
時報の鐘が、鳴り響いた。

「大佐、私はここで失礼します」

リークは、笑ったようだった。

少し駆けると、すぐルートロード塞に着いた。

要塞の中では、人が慌ただしく動いていた。いつ戦が起きるかわからない状態であるため、要塞内の空気は、緊張感があった。

ルートロードは、ナスクとルゼイラに対する、第一の拠点だった。その二国が今回帝国領となったので、この要塞の重要性は増した。

他に、遊撃塞が作られた。これは旧三国から亡命してきた将や兵をまとめるためのもので、リークを大佐とし、ここに遊撃隊を組織させていた。

共和国は、皇国とは少し違う階級制だった。大將は、皇国は方面の指揮官を指すが、共和国では中央の司令長官を指す。方面の指揮官は、中將だった。少將は、その副官を指す場合が多い。さらに戦時には、特別階級として準將が設けられる。これには前線の總大將が最も信頼している人物を任命する。下級將校が選ばれることも、たまにだけあった。

大佐は、兵科や隊の長である。リークが、遊撃隊という一つの大きな隊の長となることに、誰も口を挟まなかった。

次の日の朝も、湖へと行った。

やはり、リークはいた。

「大佐は、共和国だけで帝国に勝てると思っっていますか」

何度も繰り返して、エンス 中將 に言われた。エンスに呼び出されて質問されるたびに、最後にこの質問が出てきた。

何度も国力を対比させてはみた。

見えるのは、敗北だけ。戦う前から、敗北は決まっていた。これはまだ、エンスには話していない。

「どこを勝利とするかにもよるが、まず勝てない」  
現実を突きつけられた。今まで負けることなど、この国が滅ぶこ

となど、認めてこなかったが、やはり認めるしかないのか。

「そう暗い顔をするな。共和国だけでは、勝てないと言った」  
「では」

「それはお前が知っているはずだ」

自分が、何を知っているのか。

「教国と、皇国」

思い出す。一度だけ中将に話したことがある。教国と皇国との共闘。エンスは、それをおぼえていてくれたのか。

「それは、決して実現不可能な話ではない。自国領に他国の軍を入れない。それさえ守れば、帝国と互角に戦える」

光が、見えた。小さいが、確かに見えた。

しかしその光はすぐに消えた。

教国とは国境沿いでは紛争が絶えず、皇国は遠すぎる。

「今すぐ。でなくともよい」

早い方が良いことに代わりはないがな。

そう言い、リークは駆けていった。

これは自分だけでできることではない。まずはエンスを説き、次に中央を説かなければならない。

道は、けわしい。

道は、順調に出来ていた。

わざとライグルで密売者を検挙させ、闇穀の道から目を背かせる。一瞬だったが、道を起動させるには十分な時間だった。

ここ一年の間、何本もの闇穀の道を造った。闇穀の道とは言え、時には金となり、時には塩や鉄となった。そうして目的地に流れ着く。わざと違う行き先を教えておいたので、たとえ話したとしても、本当の行き先が割れることはなかった。むしろ、話した方が好都合だった。

しかし徐々に感じ始めるだろう。感じ始めているのかもしれない。中央は、道を徹底的に潰しにくるだろう。しかしそれには時がい

る。あと二、三年は安全だろう。

「先生。茶です」

エクトの声で、ロートは目を開けた。

「だいぶお疲れのようで。少し寝たらどうですか」

「この道が軌道に乗るまでは寝れんよ」

「そうですね。それと、書簡が届いております」

書簡を受け取る。名前は書いてあるが、偽名で、内容は暗号化されている。

「動き出したぞ、エクト」

エクトは直立したまま、ロートを見ている。

「各地方の総督が決まった。ナスクにクルノー、東ルゼイラにアイアス、西にはキラス、グリナッドには、トルナスだ」

「予想通りですね」

「全く。今の帝国には人がいない。探せばいるのだがな」

エクトは姿勢を崩さぬまま、うなずいた。

この男は仕事では効率を求め、余計なことは話さないが、仕事以外で口を開けば、いつまでも話し続ける。

エクトの、そこが好きだった。

「少し、外に出よう」

エクトを伴い、屋敷から出る。屋敷には何人もの使用人がいた。

他の大商人がしているように、自分もそうして、自立たないようにしなければならぬ。

帝都は、いつでもにぎやかだった。

そのにぎやかさが、帝国の隙だった。

表がまぶしければまぶしいほど、裏が深くなり、見えなくなる。

人だかりが、出来ていた。

一人の男を、十人ほどの男が囲んで、睨み合っていた。

それに興味を持ったロートは、人の合間からその睨み合いを見ていた。

「金は渡したはずだろう」

囲まれている男が、あきれたように言った。

「いや、足りねえんだなあ。それが」

「足りない？」

「なあ兄ちゃん。怪我したくないんだったらさっさと渡した方がいいぜ」

囲まれた男は表情を崩さずに、溜息をついたようだった。

「どこへ行っても低俗は低俗か」

「は？」

男は、顔を近づけた男の股を蹴り上げた。

絶句し、倒れ込む。

他の男たちが刃物を取り出し、斬りかかる。

しかし男は、一人の腕をつかむと、投げ飛ばし、蹴り上げ、拳を叩きつけた。

後ろで、エクトが感心したような声をあげた。

「おもしろい男を見つけてましたね」

「ああ、得体の知れない奴は大歓迎だ。だが、慎重にやれよ」

エクトが、その男の後を追った。

### 渦 三

前方に、千の騎馬。見事な横隊を組み、駆けてくる。リルは負けじと得物を振るい、手綱を握りしめた。

ぶつかる直前、リルの騎馬隊は矢の形となっていた。その形のま  
ま、敵を二つに割った。徒も飛び込み、乱戦となった。

もう一度敵を割ろうとした時、丘の上で声が拳がった。逆落とし。  
百騎ほどだか、ついさっきの騎馬隊とは全く違う圧力だった。

三百で受け止めようとし、素早く小さく固まったが、逆落としを  
かけた騎馬隊に、分断された。その騎馬隊はそのまま味方の徒をも  
分断し、勝負は決まった。

悔しさが、こみ上げてくる。唇を噛みしめる。これで何度目だろ  
うか。

常にあの騎馬隊に注意を払っても、どこからか現れ、分断される。  
正面からぶつかり合ったこともあるが、見事に負けた。

アルヴァーノとレブングがいる、丘の上に登る。

「さすがはガクレンの騎馬隊だ。よくわからんうちに勝負が着いて  
しまった」

「リルの判断も良かったんでがね。素早く騎馬をまとめたところが。  
しかし、相手が悪かった」

「戦場で、一番会いたくない騎馬隊ですよ」

エルブや他の将校も登り、最後にガクレンが登ってきた。

「見事だった。ガクレン」

ガクレンと呼ばれた男を初めて見た時は、驚いた。

完全な黒髪黒眼だった。両方とも黒いのはこの大陸では珍しく、  
魔の象徴という教国が作り上げたおかしな偏見があった。「実戦で  
あそこまで上手くいくかはわかりません」

「だが、訓練でやれないことは実戦でもやれない。今回出来たのな  
らば実戦でもやれる」

帝国は、グリナツドにトルナスを置いた。他の指揮官と比べるとどこか戦に消極的だった。言うなれば、武官の中の文官。統治を第一と考えてるとすれば、適任と言えた。

皇国への侵攻は、ノークが指揮すると考えられていた。予想兵力は少なくても八万。多くて十七万。しかし皇国にはクラウクセスと並ぶ難攻不落のラージダル関門があった。関門の兵力は最大で十万。いくらでも耐えきる自信が、皆にあった。

問題は、アリアス島だった。帝国に陥とされて以来、海岸線の守りに不安が絶えなかった。

「皆、野営地に帰るぞ」

野営地は山の麓にあり、水が湧き出していた。

「暇そうだな、リル」

木のそばに座り、一人で火を眺めていると、ガクレンが声をかけた。きた。

「ええ、もちろん暇ですよ」

「おまえが、俺の逆落としに反応出来たことには驚いた」

「偶然ですよ。偶然視界に入った。それだけのことです」

「それが凄いな。おまえが偶然と思っただけでも、あれは普通の間では反応できない位置から俺はでたん」

「目測を誤ったんでしょう」

「いや、何度もやったが一度も反応されたことはない」

ガクレンは、海から来たらしい。嵐か何かで船が沈み、皇国に流れ着いたらしい。

本人は、何も覚えていないと言った。どこの国にいたのか、どうして船に乗っていたのかも。

多分嘘だろう。本人は全て知っている。勘だが、確信していた。なぜ隠す必要があるのか。そんなことに、興味はなかった。

グリナツドの昔の仲間達が、急に懐かしくなった。共和国に流れ着き、遊撃隊を任されたと聞いたが、詳しいことまでは知らない。クラウクセス城は、未だに不落らしい。

皇国でも軍人になったものの、リルをあまり好ましくない目で見  
る者もいた。グリナッドにいた頃はそんなことはなかった。

皆で皆を認め合い、認め合いながら皆で進む。リークの人をま  
めあげる巧みさもあつたろうが、人の目を気にすることなどなかつ  
た。

今は、偶に冷ややかな目を向けられる。

それでも、戦い続けるしかなかった。戦うことしかできない。

今は配下の軽騎三百を強くすることだけを考えている。

「リルは、家族がいるのか」

焚き火が消えかかる。静かに薪を加えた。

「いません。皆、戦で死にました」

「そうか。なら、何のために戦う？」

わかりません。そういい、火を見つめた。

ガクレンの瞳が、異様な光を発していた。どこか、リークに似て  
いる。違うのは、優しさが無いこと。

「戦うことだけしかできないから、戦っているのか？」

「その通り。かもしれない」

「寂しく、ないのか？」

「どういう、意味で？」

「人として」

「捨てました。とうの昔に」

それ以降、ガクレンは何も言わなかった。

関門に戻ってから数日。アルヴァーノから呼び出された。

部屋には、多数の将校がいた。

「最近、こことミレラームの間に賊が出没しているらしい」

関門とミレラームの間には都市が無く、大小様々な村が点在して  
いた。帝国がグリナッドを占領してからは、この間は自然と空白地  
帯になっていた。

国家権力による治安維持がないため、賊が出るのも当然だった。

「しかもこの地域のほとんどの村は、皇国領となることを望んでい

る。この地域を引き込めば、防衛線と前線を上げることが出来る。賊を打ち払い、皇国領とする」

グリナツドが戦場となることは耐えがたかったが、ラージダルから攻め込むのは、難しい。

しかしその地域を獲得し、城か塞を築ければ、攻めやすくなる。だが同時に、攻められやすくなる。

城塞の建築を、妨害してくる可能性もある。城塞を建築させておき、後から奪うかもしれない。いずれにせよ、城塞を築く場合も、築いた後も、帝国との駆け引きはある。

単に賊を討伐するだけなら、将校の数が多かったが、城塞を築くのなら、この数で納得できる。

役割が、言い渡された。

## 遠きいただき 一

一隊が、巧く岩壁に張り付いた。

そのまま行けば、中腹を制圧できると確信した。しかしその隊も、上から降ってきた岩に押し潰された。

山の頂まではずきりと見える晴天。頂に建っている、クラウクセス城が生々しかった。

包囲を始めてから半年、未だにクラウクセスは不落だった。数ヶ月しか持たないとされていた兵糧も、予想を遙かに上回る量が蓄積されていることも、最近わかった。

帝国の弱みは、いつも不正確な情報だった。前の代の将軍が、謀報戦を考えずに編成したため、優秀な間者が少なかった。

「クルノー様、一度退きましよう」

攻撃を中止する鐘を打たせ、一度幕舎に戻った。

「くそつ。まただ。十二万だぞ。十二万いても陥とせん」

クラウクセスにいるのは一万。トルナルとレイオンには、四千ずついる。

三国で征服していない地域は、唯一、ここだけだった。共和国を攻める際の、後方の憂い。憂いは、絶っておかなければならない。

「ノーク殿に出てきてもらうしかないのか？」

そんなことをしなくても、陥とせるはずだ。原野戦に引き込めば、勝てる。しかし、そう簡単に誘いに乗るような敵ではなかった。何度も試みたが、敵は守ることしか考えていないので、乗るはずがなかった。

地図を取り出した。山の、地図だった。今までかかった罠などが全て記載されてある。調べた壕や、洞窟なども載っていた。調べる度に、兵の数が減っていった。

竜による罠の破壊も考えた。しかし山全体に拒竜壁 法術 が張ってあり、近づくことすら出来なかった。

本来拒竜壁とは、城を竜から守るために必須なのだが、山に張るという話は聞いたことがなかった。どこかに、法兵がいるはずなのだが、その法兵の位置すら、断定することが出来なかった。

工作兵を潜り込ませてみたものの、見つけられたか、動けないかで、連絡が取れなかった。

何年、この城を相手に戦ってきたのだろう。

八年だ。八年、この城の相手をしていた。いい加減に陥ちてくれと、泣きすがりたくなったこともあった。

犠牲は、増える一方だった。

「罨の数が減らん」

そろそろ尽きるのでは。と幾度も思った。思っただけで、尽きることはなかった。

「やはりここ放棄するのが」

何度も、考えた。が、考える度に、押し殺した。

意地。というつまらない感情でそれが出来ないのは認めていた。

鶏肋。捨てる事が出来なかった。しかし、いずれは捨てなければならぬ。

そろそろ、潮時か。対共和国のことも思案しなければならなかった。手を引くなら、今が時か。例え手を引いたとしても、あの城はさほど害にはならない。

「しかし、だな」

そこで、言葉を切った。今は、その感情を捨てるべきなのかもしれない。そう、思った。

翌日、ロフトが視察に来た。

千騎を伴い、巡察へと出た。麓の罨はほとんどないと思われるが、万一の場合を考え、山には近寄らなかつた。

「クラウクセス、トルナル、レイオンを包囲し、孤立させることはできた」

「それでも陥ちないのですか」

ロフトの声に、侮蔑が混ざっている気がした。

「正確な情報が無くてな」

「戦時です。戦時に正確な情報など、一握りしかありません。いえ、全ての情報に疑いを持った方がよろしいかと」

「質を上げることができないのかな？」

「質の問題ではありません」

ロフトは確かに優秀だった。しかし、ノーク以外の将軍を軽蔑している感があった。

若造が。クルノーは、心の中で思った。

## 遠きいただき 二

まだ、雪が残っていた。手綱を握っている手が、かじむ。

急すぎる出陣だった。どこが攻めてきたかも知らされないまま三刻（六時間）走り、半刻（一時間）の休憩が与えられた。

陽は真上に昇りかけていた。

「どこが、攻めてきたんでしょう？」

「わからない。この方向だと、リーガリー王国、リゼクス教国、帝国。どれもあり得る」

息が、あがっていた。吐く息がかすかに白い。

陽射しが暖かかった。まだ日が昇る前から出兵したので、何も食べず、空腹だった。

「隊長、召集命令です。鉄隊の先頭に集まれとのことです」

「わかった。行こう」

そう言われ、トルテは後に続いた。

「攻めてきたのは、リーガリー王国。数は、三万。理由はよくわからんが、単なる侵略かもしれん。だが、相手が何であれ理由がどうであれ、攻めてきたのなら押し返すのみ。我々重鉄隊がその要となることを、忘れるな」

重鉄隊は、重装の騎馬と歩兵だけで編成された隊だった。野戦では速さこそ無いものの、その圧倒的な破壊力で敵陣を崩し、攻城戦では城門を崩す。それが、重鉄隊だった。

「敵はすでに共和国領内へと入ったようだ。近いうちにぶつかるところ」

グラル大佐の声には重みがあった。

「久しぶりの戦か。この国に来て初めての戦だ」

対照的に、この上官の声は軽かった。

クセスという女だった。グリナッドから来たと本人は言っている。グリナッドに女の将がいると聞いたことがあったが、まさか自分の

上司になるとは、思っていなかった。

一人だけ、例外的に遊撃塞ではなく、ここに来た。男のような顔を想像していたが、はっとするような美人だった。

来たばかりの頃、陰で笑われているのを聞いたことがあった。しかし、本人は全く気にしていないようだった。

女だからと言って命令を聞かない兵も、しばらくすると、命令を聞くようになっていた。何もしていない。ただ、普段通り動いているだけだった。

次第に、周囲の将校もクセスの実力を認め始めた。だが、未だに嫌っている将校も多い。

進発した。共和国の兵数は三万で、王国と同数だった。

リーガリーは共和国の西にあり、その南にはリゼクス教国があった。最近ではリーガリーとのいざこざはなかったが、良好とも言えなかった。教国との国境では、絶えず紛争が続いていた。

平野に、兵の音がこだました。

前衛のぶつかり合いが始まった。

魚鱗。伝令の音が聞こえた。重騎の半分の二千五百は鱗の先頭をいき、敵を乱す。その後には歩兵が続き開けた穴を大きくし、残りの重騎で完全に敵を崩す。重騎の攻撃は、半端な抵抗では止めきれない。

「あの敵なら、一撃で潰せる」

駆け出す直前、クセスはそう言った。クセスの隊は、先頭の前頭を駆ける。

疾駆。と言うには少し遅いが、重騎は駆け始めた。

敵の、騎馬隊。少しの重みもなく、あっという間に乱れた。

クセスの剣がしなやかに舞い、二つ三つと首を落としていく。それは思わず見とれるような技だった。

鉄の楔。鋭利で、頑丈な楔。それが、最もこの隊にふさわしい呼び名だと、トルテは思った。

歩兵が飛び込んでくる衝撃が、確かに伝わった。もう、止められ

るものは何も無い。

衝撃は大きくなり、敵は潰走を始めた。後少しで、敵陣を二つに割れた。

「脆かった。何でも無い、ただの敵だった」

「追撃は、軽騎がする。重騎では遅すぎる上、馬がもたない。」

「帝国と、比べて。ですか」

「まあね。指揮官や兵数の違いもあるだろうけど」

「帝国は、強いんですか」

「最後のノークの時は、そう感じた。粘って一気に突く。そんな感じかな」

クセスが兜をとると、風が吹いてきた。

「リーク殿はどうなのですか。寡兵でもノークと互角に戦ったと聞きました」

「静かに見ている。例えて言えば、雲の上の傍観者。熱くなること

がない。一度だけあったけど」

「軍人としては、珍しいですね」

「逆に私たちが熱すぎたから。熱くなり過ぎた石を冷やしてくれた」

汗がひき、今度は少し寒くなってきた。

追撃に出ていた軽騎が、戻ってきた。

次の戦場はどこなのか。考えているのは、それだけだった。

## 新たなる秩序 一

また、春が巡ってきた。

ノークはこの一年、新たに領地とした旧三国の軍備に忙殺された。忙しい、と思う時間さえ無かった気がした。

ほとんどの事は上手く進み、最近、やっと暇ができた。だが、早急に解決しなければならぬ問題も多い。

「申し訳、ございません。私の、責任です」

ロフトがうなだれて、絞り出すように、そう言った。

「いや、お前の責任ではない。あの書簡は俺も何度も見直した。何がいけなかったのか、正直わからん」

リーグリー王国の、暴走。書簡には、機を待て、と書いたはずだった。

裏で書簡のやりとりを慎重にしていたが、何かに捕まれた。そう、考えるしかなかった。

四人に持たせたの暗号化された書簡。さらにその後、暗号を解くための鍵を持たせたものを二人、送った。

それを全て捕らえて、改竄。あるいは、偽装。

「影部」

「まさに。それしか考えられん」 知府（地方の長官）のカラー트가、口を開いた。

「今回のことは、仕方が無かった。影部に目を付けられてしまったのなら、仕方が無い。そう、割り切ろう」

「しかし」

「カラートの言う通りだ。こっちは、そういう組織を育てている途中だ。しかし、一つ気になることがある」

「何？」

「影部が絡んでいるとすれば、リークも絡んでいることになるな」  
「確かに。影部は奴の組織だからな。だが、その何がおかしい」

「グリナツドにいた頃の話ならまだしも、今は、共和国の将校の一人だ。独断なのかエンスと決めたのか。もし独断なら、一人の将校がこの大陸を動かしていることになる」

「影部がどれほど大きいのか、想像するのが怖いな」

「この件に限った事じゃない。グリナツドを潰したのも、リークの意志だったのかもかもしれない」

「書簡はこちらから送ったはずだろ？」

「いや、シドルにしては、やけに判断が速かったなと。こっちからは、ただ、グリナツドを乱せ。としか送っていない。元々あまり期待はしていなかったからな」

「なぜ、自分の国を潰す必要が」

「それは、わからない」

「闇穀の件も、影部が絡んでいる気配があるな」

「ああ」

「単なる賊ではないのかもしれない」

「何かが起ころうとしているのかもな。俺らには想像もできない何かが」

「何が起こるといえるのか。単なる賊かもしれない。影部の気配があった。気配があるだけで、実際にはいないのかもしれない。」

「闇穀については、出所はライグルだけではないだろうし、行き先はアリアスだけでもないはずだ」

「分散と貯蔵」

「この国の富を、少しずつ削り取っていくつもりなのかもな」

「考えすぎだ」

「念には念を押す。徹底的に洗い出す。それがこの国のためになると思えばいい」

カライトが、息を吐いた。

「ところで、魔軍のことだが」「報告は聞いた。グリナツドの西の方を荒らし回っていたらしいな。皇国に駆逐されたらしいが」

「グリナツドだけではない。彼方此方を荒らしている。どうにかな

らんのか」

「現状では、どうにも」

「このままでは、帝国に対する敵意を拭えん」

「帝王に直訴することは不可能でしょうか？」

「ロフトが顔を上げ、口を開いた。」

「難しいな。何せ私らは嫌われておる」

「中央との食い違いが激しいからな。そもそも、平時の独立行動権というのがおかしい」

しばらく、沈黙。

「戦時なら、おまえの命令には従うのだな？」

「まあな」

「なら、魔軍を常時臨戦態勢にしておけばよいのではないのか」

「どうやって？」

「皇国と共和国と教国。この三つの国境に魔軍をおけばいいのではないか。そのためには、あちらから攻めるてくるか、こちらから攻めなければならんがな」「なるほど。その後も、臨戦態勢を解かずにその場所に留まらせる」

「そうなるまでは、お前が釘を刺しておいてくれ」

「わかった」

話は、これで終わった。

翌日、ミレラームへと行くため、スクレートを発った。

ミレラームは、シドルの軍が入った際、荒らされ、跡形もなく、焼き払われた。トルナスがその再建に尽力してくれたので、予想以上の早さで城郭は元に戻った。

ミレラームには、十四日で着いた。

「お待ちしておりました」

庁舎にはいると、トルナスが出迎えた。

相変わらず、気の弱そうな顔が気になった。

「見事だ。正直、ここまでやるとは思っていなかった」

「ミレラームは、トレスゴ公国に対する拠点でもありますから。と

「ところで、今日はどのようなご用件で？」

「リバレッジ皇国と、トレスゴ公国に対するお前の意見を聞きたい」「書簡でよいではありませんか」

「この手の話は直接会って話したい。それとも、俺がきたら迷惑か？」

「そのような意味ではありません。わざわざ総大将がこのような辺境に来なくても。そういう意味です」

「まあいい。とりあえずお前の意見を聞きたい」

トルナスは軽く頷き、話を始めた。

「まずはトレスゴについてですが、降伏勧告を隠さず、公に出すべきです」

「公に」

「はい。裏で工作をされるよりも、各国の目を向けさせ、不自然な部分を作らないようにします。断れば、討伐。恭順の意を示せば、公族の命は保障します」

「リバレッジは？」

「こちらについては、何も申し上げることはありません。この戦争を終わらせる。その名分で、戦うしかありません」

「違うな」

「はい？」

「お前の考えていることはそんなことではない。俺はお前の考えを聞きに来たのだ。世論を聞きに来たわけではない」

「私は」

「俺の目を見る、トルナス」

頼りない目は、ゆっくりと、しかし、しっかりと、見つめ返してきた。

## 新たなる秩序 二

城壁を子供が一人、走り回っていた。

その後をエルブが必死で捕まえようとしているが、捕まらない。

「和約。ですか」

隣にいたレブングが、呟いた。

「まだ、提案だがな。帝国側も、相当揉めたらしい。最後は、宰相の一声で決まった」

「よく踏み切りましたね」

「もう疲れているんだ。戦争に。これからは、戦争による富から、純粹に国を富ませる時代になるかもしれない」

ようやく子供を捕まえたエルブは、そのまま抱き抱え、こちらに歩んできた。

「我々軍人はもう必要のない時代だと？」

「不要。ではないだろう」

数週間前、帝国が突然和約を申し入れてきた。

昔の対立のことは忘れ、争いをやめる。昔は熱狂的な信者達がい  
て、それは即座に撥ね退けられただろう。

時代は変わった。信仰心の厚い者はいるが、狂信的な信者などい  
ない。百数十年にもわたる戦争が、信仰を忘れさせた。正確に言え  
ば信仰を忘れたわけではない。

宗教は、心の拠り所となるだけでいい。ユトレヒトは、そう考え  
ていた。

「副将殿。そう難しい顔をなさらずに笑っていればよいではないで  
すか」

「私に何で笑えと？」

「おやおや、兄と同じことを言うんですかい。何でもいいですから、  
笑ってればいいんですよ」

どうしたもんかな。そう考えていると、村を廻っていた隊が帰っ

てきた。

「エルブさん、ネイが迷惑をかけませんでしたか？」

「なに、子供の扱いにはなれてる」

ネイは、リルが村で拾ってきた子供だった。その村の村人はネイ以外全員殺されていた。親が殺されているのを目の当たりにしたらしく、しばらく口がきけなかった。

娘は、リルが自分が面倒を見ると言った。どうやら、本気らしい。

「そう言えば、エルブには妻子がいたな」

「ええ、ほとんど別れたも同然ですがね」

エルブが、苦い笑顔を作った。

「いや、いるだけでいい」

旧グリナツドの西側に、新たな城郭が造られた。その城郭は、レクタレッジと名付けられた。

戦争になれば、こことラージダルで二重の守りとなり、和約が成立すれば、皇国の玄関となる。いずれにせよ、都合の良い場所だった。

「ところで、大将殿の意志はどうなっているのですか？我々はまだ聞かされておりません」

「和約には、賛成だ。多分、和約となるだろう」

「どうしてそう言えるのです？」

「これは、格好の機会なんだ。西に対する」

「リヴァーム神国」

軽く、頷く。

「あそこは凄惨を極めているらしい。いくら兵がいても足りない状況だそうだ」

「誰かが、あっちに移されるかもしれませぬ」

「そうなるかもな」

誰がそうなっても、おかしくはなかった。

裏を隅々まで、見て回った。

巨大な、闇だった。巨大なだけでなく、素速く動く。

「帝国と皇国の和約が成立した。私達には、何の関係もないが」  
小太りの男が、振り返った。

「国内に目が向けられるのでは？」

「しばらくは、向かない」

「しばらく。とは？」

「この和約に猛反対している官僚や軍人がかなりいる。近衛万軍の  
ラスリーを筆頭としてな」

「それがこの国を乱すと」

「その可能性が高い」

スレイは、出された茶に手を伸ばした。

「どう思っている？スレイ」

「何を？」

「国の裏側をだよ」

この男に声をかけられてから、

「興味深い部分はいくつもあった」

ロート達に誘われてから、半年の間、帝国の、この大陸の裏を見  
て回った。様々な場所を廻ったが、ほんの一部にすぎないらしい。

「この計画が発動するのは、まだ先か」

「そうだな。その間に、もっと物資を貯めねばならん」

「だが、同時に、難しくなるな」

「どうしてだ？」

「ノークだよ。そのラスリーが叛旗を翻したとすれば、鎮圧すると  
同時に、中央に出てきて、軍にいる屑どもを一気に追い出すんじや  
ないか。そうになると、隙がなくなる」

「成る程な。そのような考え方もあるか。だが、有能な奴が出てく  
るとは限らん」

そう言っつてロートは、立ち上がった。

新たなる秩序 二（後書き）

『静天遠く』 終わり

静天遠く

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1960c/>

---

静天遠く

2008年11月7日07時14分発行